

談話室

視 点

田 中 勝 男*
Masao Tanaka

愛知県豊田市に住むようになって30年弱、一般交通機関が少なく日頃の移動手段は専ら車となる。ある時体力の衰えを感じ、家の回りを中心にジョギングを始めたが腰に負担を覚え、自転車によるサイクルジョギングに切り替え市街地、田園地域を走り回りました。ジョギング時と比べその行動半径は大幅に広がり、新しく多くのことに気がつきました。車を運転している時には自転車がうるさく、そのマナーが気になり、逆に自転車の場合には、ドライバーの自転車に対する思いやりの少なさが気になります。乗用車を運転しているときと、運転席の高い車を運転しているときとは、景色も変わり運転マナーが随分変わるとの話を聞いたこともある。同じ人間でもこんなに違うものかと改めて再認識したことが思い出されます。ドライバーの見える範囲はスピードが速くなればなるほど狭くなる。そして、車と自転車とではそのスピードと視点の高さの違いにより、目に入ってくる景色は大きな違いがある。サイクルジョギングでは季節の移り変わり、街並み、身の回りの小さな変化を肌で感じる事が出来る。この新発見は非常に新鮮で楽しい感動である。

この90年代に入り、環境問題は様変わりを見せている。高度成長時代初期の60年代から、四日市ぜんそくに端を発した大気汚染問題、河川水の汚染、騒音・振動・臭気問題等を含む7公害問題として大きくとりあげられた。又、80年代後半からは人手不足を反映し、アメニティ性を旨とした作業環境改善への取り組みが経営者に求められてもいる。これらは地域、あるいは

職場環境問題としての対応を迫られたものであるが、90年代になり廃棄物処分問題からくるリサイクル技術や、エネルギー回収技術の開発等の身近な課題、炭酸ガス発生抑制による地球温暖化防止策と、化石燃料以外の電源開発施策の関係、未利用エネルギーの活用技術、酸性雨と森林破壊等、地球規模の課題への対応が提唱され始めた。これらは全て省エネ活動と大きな関わりをもっている。資源は有限であり省エネルギー活動は古くて新しい課題でもある。従来、経済性のみで判断されて来た省エネ対策から環境保全性も考慮した、つまり環境対策費も必要原価としてとらえた新たな省エネルギー活動が求められる時代になって来た。リサイクルとエネルギー、エネルギーと環境、あるいはリサイクルと環境といったように関係が多岐に渡っており、より複雑化して来ている。今後は、産・官・民が一体となり、エネルギー・資源相互利用システムの確立に取り組み、それぞれの垣根を越えた活動によって、総合エネルギー利用効率を大巾に向上させること等が肝要である。これらは立地条件に大きく左右されることから、土地利用計画の段階からリサイクル・エネルギー等の地球環境問題を考慮した町づくり、工場づくり（町と工場との調和）といった取り組みが必要となろう。

21世紀に向けて「人と地球に優しい物づくり」をキーワードに、今までとは視点を大きく変え、幅広く、総合的な観点より対応を求められており、我々にかけられた課題は大きい。

*トヨタ自動車(株)プラントエンジニアリング部部长
〒471 愛知県豊田市トヨタ町1番地